

アキレウスの賞品供与

(パトロクロスのための葬礼競技における)

吉 武 純 夫

はじめに

K. Meuli は、‘Entstehung und Sinn der Trauersitten’¹⁾ という論文の中で、服喪者 (der Trauernde) が「示威的に贈物をする」(demonstrativ zu verschenken) という行為が多くの民族における慣行であると記している。ただしその記述には例示や典拠が伴っておらず、また私が手の届く範囲内の文化人類学の文献で調べた限りでは、ごく僅かな例しか見出すことができなかった²⁾、そのような行為が世界各地の服喪者の慣行であるとは安易に確信できない。しかし、Meuli が問題にした行動パターンは我々にとって未知のものではない。それどころか、よく知られた *Ilias* 23巻の長大な葬礼競技の描写の中に組み込まれている。*Ilias* は、アキレウス (以下 Ach.) が慣習に従ってその行動パターンを踏襲した様に描いているというよりも、彼がなぜその行動パターンに沿って振舞うのかが理解できるように動機付けを行っていると考えられる。本稿は、パトロクロス (以下 Patro.) のための葬礼競技における Ach. の賞品供与を、*Ilias* はどのように動機付けているのかを探り、この葬礼競技の総合的な理解のための一つのステップとしたい。

I. アキレウスの賞品供与の特性

23巻の Patro. のための葬礼競技は賞品の紹介に始まり、賞品の授与に終わるが、途中も競技ごとに賞品が次々と配られて行くありさまが語られる。そこでは多数の賞品の存在が強調されており、それらの賞品を Ach. が気前良く、しかしいくつかの点で奇妙と思われる仕方で供与していく様子が描かれていることが注目される。

(i) 賞品の強調

葬礼競技の記述は、Ach. が「軍勢をその場に引き止めて、広いアゴーン (集会) の形で座らせて、船々から賞品 (ἄεθλα) を運び出させた」(23.258-59) という narrative の形で始まるが、何のための何の競技かということにも触れないままに、続けて2行半にわたってその賞品の列挙が行われる (259-61)。引き続き、「騎士たちに対する賞品としては」という形で戦車競走の賞品の羅列がさらに8行にわたって行われる。しかもここで開催される競技が「誰かのための競技」(ἐπί + 与格) であるということは、*l.* 274 に至るまで特に示されない。また、全部で8種目の

競技が行われるが、そのうち戦車競争も含めて最初の4種目が「ἀεθλα(賞品)を置く」または「ἀεθλαとして～を置く」という表現によって導入されている。確かに、この葬礼競技に限らずとも、古代ギリシアの少なくとも叙事詩の世界では葬礼競技においていつも賞品が重要な要素を占めていたらしい³⁾。だから、賞品が葬礼競技にはつきもので、「ἀεθλαを置く」というような表現は葬礼競技の(あるいは競技会全般の)開催を表す一般的な表現であったという可能性は否定できない。しかし、誰か死者のための競技会であることが示される前に賞品の羅列が延々と続くという事実は、賞品の多さを強調したものと考えざるを得ない。

もちろん、さまざまな文献・史料には多数の葬礼競技が報告されてはいるものの⁴⁾、我々の葬礼競技以外では、一回の葬礼競技で出された複数の賞品の分量についての具体的な記述は文献上もその他の史料上も、ほとんど見当たらないようである。だからこの葬礼競技の賞品の総量が他の葬礼競技のそれより多いかどうかという判断はできないのが実情である⁵⁾。しかしホメロスとヘシオドスのテキストにおいて言及されている他の葬礼競技と比較する限りにおいては、ある程度の判断が可能である。すなわち、*Ilias* 内では他の2つの葬礼競技が言及されているが、その一つ、22巻で「人がみまかった折の」徒競走を戦闘における敗走急追の simile が語られている所(164)では、「豪華(μέγα)」と形容された賞品は、「三脚釜か女のどちらか一方」(ἡ τρίπους ἢ ἡ γυνή: 22.164) が置かれるとされており、徒競走については賞品が一つしかないことを暗示している。少なくとも上のような賞品の多さは示されていない。もう一方の、23巻で Nestor が Amarynkeus のための葬礼競技に参加した折の自らの連勝を自慢げに語る所(630-40)でも、彼が手に入れたであろう賞品のことは何も示されていない。*Odysseia* 内ではただ一箇所、24巻(85-94)で Ach. のための葬礼競技のことが Agamemnon (以下 Aga.) の亡霊によって報告されており、「見事に美しい賞品(περικαλλέ' ἀεθλα: 85, 91) が供されたことが言われているが、その分量については何も示されていない。ヘシオドスは『仕事と日々』(654-59)で、自身が Amphidamas の葬礼競技に参加したことを記しており、「多くの」(πολλά: 655) 賞品が供されたというが、具体的には、ヘシオドス自身が歌の競技で把手つきの三脚釜を手に入れたことしか示されていない。これらに対して、*Ilias* 23巻の葬礼競技の場合は、賞品の羅列という形で賞品の総量が具体的にこと細かに語られているのである。このことから考えても、ここでは賞品の多さが強調されているのだと言う印象は場違いではないと言えるだろう。

(ii) 賞品供与の奇妙な諸点

次に、賞品供与の仕方の注目すべき点を見てみよう。

戦車競走においては、最初第一位で走っていた Eumelos が転倒して最下位の第五着となる。競技の審判として Ach. は「一番実力のある男が殿となって馬を走らせて来る。彼に相応しい賞を与えよう。二等賞をな。」(536-38) と語り、二等賞に予定していた賞品を彼に授けようとする。しかし第二着の Antilochos から抗議されると、その賞品は Antilochos に戻し、Ach. は

その代わり新たに二等賞と同等の賞品を用意して Eumelos に与える⁶⁾。そして、もらい手なく残った五等賞の賞品は競技に加わらなかった老人 Nestor に与えられる。

他方、第四番目の競技である徒競走においては、三人の競技者が走ったうちの最下位になった Antilochos が Ach. に向かって、「我らアカイア人にはこの方（一着の Odysseus（以下 Ody.））と脚で勝負するのは難しい、Ach. は別として」とお世辞を言うだけで、Ach. は三着の賞品の黄金半tal. を倍増して彼に与える。

また他方、第五番目の競技である armed duel では、まず narrative が Sarpedon から奪った武具（槍（ἔγχος）、楯、兜）を賞品として紹介するが（798-800）、それに続くセリフの中で Ach. はあたかもいま思いついたかのように⁷⁾、Asteropaios からの分捕り品である「この銀鋳打ったトラケ製の見事な太刀」（807-08）を新たに勝者への賞品として言い加える。

更に、第六番目の競技である鉄塊投げを除けば、すべての競技において、参加する競技者全員に賞品が当たるようになっている。戦車競走・徒競走・槍投げにおいては、賞品の当たるだけの人数しか競技者が名乗り出なかつただけのことだと解釈することは可能であるが、しかしボクシング・レスリング・armed duel・弓競技においては勝者と敗者の両方に賞品が用意されているのである⁸⁾。

また更に、最後の競技である槍投げにおいては、Aga. と Meriones の二人が参加を申し出ると、Ach. は試合をさせずに、「牛一頭分の価値の釜」を Aga. に、「青銅の槍」を Meriones に授ける⁹⁾。

今列举してきた諸点から、Ach. の賞品供与には2つの傾向が見出される。その一つは、賞品供与が気前よくなされているということである。提供した賞品の総量の大きさもさることながら、戦車競走における二等賞相当の特別賞の追加、armed duel における勝者賞の追加、徒競走における Antilochos への賞品倍増、および、賞品を敗者までほぼ全員に当たるようにしたことからも、そのことは明らかであろう。

もう一つの傾向というのは、賞品供与の変則性である。第一に、戦車競走において最下位の Eumelos に二等賞を与えようとしたことは、Ach. の裁量の恣意性を表すものである。なるほど彼は Eumelos を「最も優れたもの」（ῥηίστος：536）だと言っている。また観衆もそれに同意するから、全く無茶な振舞ではないだろう。しかし、後で結果的に行き着く特別賞を設けるという形にはせず、この試合では実績を残さなかつた彼に、二着の者をさしおいて二等賞を与えようとするところに問題がある。Ach. が1巻以来19巻まで Aga. に腹を立てていたのは、Aga. が実績主義¹⁰⁾に逆らう形で権力を乱用したからであったが、二等賞問題に関しては Ach. も Aga. と同じ振舞をしているといえる。Antilochos の抗議（543-54）はこの点を突いている。このことは、Ach. が今、これまで彼の原則であった実績主義という立場を必ずしも守らずに賞品供与をしているということの意味する。Ach. にしてこのような振舞を行うということは奇妙なことだと見做さざるを得ない。

第二に、徒競走において Antilochos の賞品が倍増されることに目を向けよう。彼が結果的に手に入れる賞品は、黄金 1 tal. で、それは Macrakis らの計算によると、二等賞の牛一等と同等の価値を持つものとなる¹¹⁾。つまり、3着で最下位の者がお世辞を言ったために、2着の者と同じ賞品を得ることとなる。このことは、9.318-19 で Ach. 自身が不平の対象としていた Aga. の流儀とまさに同じである。

第三に、槍投げにおいて、試合なしのまま Aga. と Meriones に与えられる賞品と、戦車競走で不参加の Nestor に与えられる 5 等賞である。これらもやはり、実績に対応して褒賞を授けるという原則からの逸脱であろう。なお Aga. への賞品供与については、「番人に優れている」(προβέβηκας ἀπάντων : 890/ἄριστος : 891) ことが明らかであるから、と理由付けてはいるものの、そこで与えられる賞品が牛一頭分のものに過ぎないということについては、他の競技の賞品と比較するならば Ach. の言葉の真意を疑わざるを得ない¹²⁾。

このように、Ach. の賞品供与のやり方には、競技会の審判の本来の任務からもかなり逸脱している面が見られるし、また彼が従来とってきた立場からは予想できぬような振舞いが散見される。この意味で彼の賞品供与は変則的でもあると言わざるを得ないのである。

Ach. の賞品供与の特性とは、これらの 2 点(気前のよさと変則性)である。これらの 2 点は、大抵の場合、重なって現れている。

(iii) 従来の解釈と新しい解釈の余地

このように賞品の多さが強調され、そして賞品供与の気前のよさと変則性が壮大な規模で描かれていることには、何らかの大きな意味があることが推測される。ではどんな意味があるのか。Ach. が気前良くしかし逸脱行動的に賞品を供与するのはどういうことか。ところがこの問題を正面から取り上げた研究は管見の限り見当たらない。そこで、23巻葬礼競技における賞品供与の機能についての従来の一般的解釈の主なものを見てみると、大体次の通りに分類される。

- ① *Ilias* のフィナーレの前に、平和的状况の中でそれまでの戦いや不和を回顧させる¹³⁾。
- ② γέρας(手柄・名誉の褒章)の配分の秩序回復を表す¹⁴⁾。
- ③ Ach. の寛大さを示し、24巻における Hektor の屍体返還を準備する¹⁵⁾。
- ④ Ach. の、Aga. との和解とコミュニティへの復帰を表す¹⁶⁾。
- ⑤ 沢山の豪華賞品によって Patro. (および Ach.) の名を残す¹⁷⁾。

これらの解釈は、たしかに Ach. の気前のよさには注目している。しかしどれも賞品供与の変則性には関心を向けていない。そして、気前のよさを説明しているにしても、①～④は「Ach. に気前良く振舞わせることによってどういう効果を生むことを作者が意図しているか」、という詩作上の目的を説明するものである。「どうして Ach. は気前良く振舞うのか」という、Ach. の動機を説明しようとするものは⑤だけであろう。

ここで問題にしたいのは後者(Ach. の動機)のほうである¹⁸⁾。もちろん⑤の説明は何ら否定

されるものではない。ℓ.619でAch.がNestorに向かって、「さあこれをPatro.の甲いの記念にして大切に家蔵していただく」と言い、ℓ.646でNestorが「友を賞品で葬ってやれ」と言っているからである。しかし、気前よい賞品供与の動機はそれだけで十分説明されるであろうか。Ach.自身にとっては、それだけの意味しかない行為と考えてよいであろうか。

ここで思い起こすべきものは、Od. 24巻における「Ach.のための葬礼競技」についての短い言及である。Aga.の亡霊は、その葬礼競技を回想する件り(Od. 24.85-94)で、次の3つのことを語る。

(a) Ach.の母Thetisは、息子の葬礼競技のために、神に請うて賞品を差し出したが、その賞品は目を見張るほどの見事なものであった。(24.85-92)

(b) そういうことになったのは、Ach.が神々に非常に愛されていた(φίλος ἦθα)からである。(24.92)

(c) そのようにしてAch.は永遠の名を残したのである。(24.93-94)

ここには、「Ach.の名が残った」という「賞品供与の結果」があるほかに、「神々の彼への愛」という「賞品供与の動機」があることが示されている。つまり、賞品供与の豪勢さとは、死者の名を残そうとする意図の指標である以前に、賞品を提供する哀悼者(mourner)から死者への愛の大きさを表す指標なのだ、とAga.は解釈しているわけである。このことは、ホメロスの叙事詩においては、賞品供与の仕方が、賞品提供者の社会的な配慮のみならず個人的内面的な心情の現れとして解釈され得ることもある、ということを教えてくれる。それゆえに、Ach.の賞品供与の場合も、その気前よさにせよ変則性にせよ、Patro.の名を残そうという意図より以前に、彼のより個人的内面的なもの(何らかの心情)によって動機付けられたものとして解釈される余地があるのではないかと疑われるのである¹⁹⁾。

そこで本論はここから、Ach.の賞品供与の動機付けを、特にその気前のよさと変則性に注目してテキストの中を探ることをめざす。

II. 9巻と19巻の財物リスト

先にも述べた通り、23巻の葬礼競技は、賞品となる財物の長いリストを語ることから始まる。Iliasではこのほかにも、9巻と19巻においても財物の長いリストが語られる機会が計3回ある。それらはいずれも、最終的には、Ach.が「手持ちの財物以外の財物には見向きもしない」という構図を築くものとなっている。この繰り返しは、Ach.には財物に対する一定の態度が生じていることを強く暗示するものだと考えられる。もしそういう態度があるとする、それは、葬礼競技においてもやはり多数の財物が列挙され、それらをAch.が惜しげもなく放出することの意味を探るためには、無視できない前提であろう。

9巻と19巻の3つの財物リストとは、いずれもAga.が、Briseisを奪ったことに対する償いとしてAch.に支払うことにした償い代(ἀποίνα)のリストである。1回目に語られるリスト

(9.122-56) は, Aga. 自身が Nestor に向かって口述したリストであるのに対し, 2 回目のリスト (9.264-98) は, それを, Aga. からの使節として派遣された Ody. が Ach. の前で復唱したものである²⁰⁾。3 回目に語られるリスト (19.243-49) は, アカイア勢の集会において Ody. 以下の一行が, 戦いに復帰する準備を整えた Ach. の前に運び出した償い代を, narrative が示したものであり, 先のリストに掲げられていた品々のうち, 即刻支払うものとして前半にあげられていたものである。

(i) 9 卷

まず 9 巻での財物リストに対する Ach. の対応を検討してみよう。Ody. から, Aga. が Ach. の戦闘復帰を望んで豪華な償い代を申し出ている, ということを聞かされた Ach. は, 122 行に及ぶ長い拒否の返答 (308-429) を語るが, そのうち 39 行 (378-416) が, 償い代およびその他の財物の拒絶を示すために費やされている。その内容を整理すると,

- ① 378-87: Aga. からの贈り物は厭わしく (*ἐχθρά*), 私にとっては毛髪一本の値打ちしかない。どれほど沢山の財物をくれようとも, 私は求めに応じない。
- ② 388-400: Aga. の娘を妻にはしない。故国で妻を娶り, 父の蓄えた富を享受して暮らそうと思う。
- ③ 401-09: というのは, イリオスやピュトの全財宝も, 私にとっては命には値しないからであり,
- ④ 410-16: また私には 2 筋の運命があり, 戦いを続けるならばこの地で死んでしまうことになっているからだ。

ということになる。

この中で重要なのは, ①において, 提案された贈物の受取を拒絶するに際して, Ach. は増額を要求しているのではないということである。彼は, *ℓ. 387* で「(Aga. が) 私に対して, 心苦しい侮辱をすべて償う (支払う) までは」(*πρὶν γ' ἀπὸ πᾶσαν ἐμοὶ δομέναι θυμαλγέα λώβην*) という条件をつけて要求を拒絶しているが, どんな形でなら十分な償いになるのかは明らかにしていない²¹⁾。彼の言葉が明らかにしているのは, この状況のもとでは, 財物によってこの問題を解決することはできないということである²²⁾。それは, 彼が, ホメロスの世界の英雄たちが認め²³⁾, 彼自身も以前は当然の如く認めていたところの²⁴⁾, 名誉の顕彰としての財物の効能を見限ったということを意味する。

また③では, Ach. は, 財物は彼自身にとっては命の代価にはなりえないと断言する。ただし, 先にそれまでの報酬に対する不平を述べた件り (9.315-36) の中で, 彼が「いつも私の命を投げ出して戦い, 苦しみを味わっているのに, 私には特別に何が与えられるわけでもない」(321-22) と語っていることは, 彼も以前は, 命がけの戦いには財物による相応の代価が支払われることを期待していたということを明らかにしている。しかし今や彼は, 「財物は命の代価たりうる」と

いう考えを改めたのである²⁵⁾。

Ilias の作者は Ach. に①と③の二つの言い方をさせて、Ach. が財物の効能を見限ったということを強調しているのだと考えられる。それは、彼が財物全般を「額面通りの価値しかないものに値踏みした」ということに他ならない²⁶⁾。

(ii) 19巻

次に19巻での Ach. の対応を見てみよう。ここでは、財物のリスト (19.243-49) が語られる前に、償い代の支払いについて Aga. と Ach. の間で言葉のやりとりがある。集会 (40-275) の最初に、Ach. が Aga. に対する怒りを収めて戦いに復帰することを宣言する (65-71) と、Aga. は喜び、*γέρας* (19.89) を奪ったことの償いとして「莫大な償い代」をすぐに支払いたいと申し出る (138-44)。しかし Ach. はこれに対し、

① 「賜る品々については、それを当然のこととして下さるのならばそれもよし、また手元に留めておかれる (*ἔχέμεν παρὰ σοί*: 19.147²⁷⁾) のもあなたのお考え次第。それよりも今はすぐに戦い (*χάρμην*) のことを考えねばならない。こんなところでのんびり議論を交わし徒に時を費やしている場合ではない、まだ仕残した大切なことがあるのだから。」 (146-53)

と語る。しかし、*Ody.* はすぐさま彼に、アカイア勢に食事をとらせることを勧め、Aga. は再び償い代の支払いを戦闘の前に済ませたいという旨を述べる。ここで償い代のモチーフと食事のモチーフとが混ざり合う。Ach. は彼らへの一続きの返答 (19.199-214) の中で、

② a 「そのようなことであれこれ立ち働くのは、他の時になさるのがよろしかろう、例えば戦いが一段落ついた時や、私の胸中の戦意がさほど強くない時に。(200-02)」

② b 「その時 (*sc.* 侮辱を仕返する時) までは酒も飯もとても私の咽喉を通るものではない、友が死んだという状況では。(209-10)」

② c 「そのようなことは、私の念頭には全くない、あるのはただ殺しと血と、兵士らの無残な呻き声だけだ。(213-14)」

と答える。しかしそれでも *Ody.* は、軍勢には食事が必要であるとの説明を含めた、戦闘のための実務的な勧告を行い、償い代についてはこれを特に語ることをせず *Aga.* の陣屋から集会場へと運び出し始める。財物のリストが narrative において語られるのはこの時である。償い代は Ach. の部下たち²⁸⁾ によって彼の陣屋へと運ばれて行く (278) が、Ach. はこの間何も語らず、成り行きに任せている。償い代については彼はその後も何も語らない。

Ach. は①および② a で、今は財物に心を向けたくはない、財物のことはどうでもよい、という態度を示しているわけだが²⁹⁾、それは彼の心が戦闘にはやる気持ちで占められているからであるということが、② c により明らかである。償い代のことは今、自己の名誉の顕彰としても、財物としても、いかなる意味においても彼の眼中にはないのである。

もちろん、それは戦闘にはやっている現在の一時的なことかもしれない。実際、財物に対する

彼の関心のありようが直接に語られる機会はまだ無いので、その点をはっきりさせることは難しい。しかし、そのような内的状況が葬礼競技が始まるころには解消されてしまっていると考えてよいであろうか。これが我々にとっての問題である³⁰。

確かに、②a・cでは、財物に心を向けたくはないという心境は、心が戦闘にはやる気持ちで占められているということで説明されている。だから、後に何らかの戦果が上がった時、特に Hektor を打倒した時には、その心境が変化することも想定しうる。しかし、Ach. が財物への関心を失っているのは、今たまたま復讐欲であるところのある強烈な情念によって心が占められているからなのであって、財物と復讐の間に特別の関係があるからというわけではない。だから、彼の心が復讐心とは別の何らかの強烈な情念によって占められた場合にも、彼が同じ心境に置かれることはありうると考えられる。19巻での財物のエピソードは、財物に対するAch.の執着の相対的な弱さを描いたものに他ならない。この時点における彼のその執着の弱さは、9巻で財物の効能についての見限りが観察されたことによっても裏付けられるものである。

(iii) 絶食のモチーフ

ここで注目されるのが、②bに語られている絶食のモチーフである。というのも、*Ilias*はこのモチーフによって、Ach. が19巻から23巻の葬礼競技に至るまで、何らかの強い情念に囚われた状態にあり続けることを明らかにしているからである。

②bのセリフは、Ach. が、飲食に関心を向けないどころか、断固として飲食を忌避する様子(οὐ πῶς ἄν … : 19. 209)を示しており、そしてそれは「友が死んだから」(ἑταίρου τεθνηῶτος : 19. 210)でもあり、また「まだ侮辱を仕返ししてやっていないという状況だから」(… ἐπὶ τεισάμεθα λώβην. / πρὶν … : 19. 208-09)でもあるということを表している。もちろん、「死別による飲食の忌避」は、「復讐欲という情念に心が占められたことの結果としての飲食の放棄」と同じものではない。飲食の忌避は、mourning ritual として、強烈な情念を伴わずとも行われるものであった可能性もあるから³¹、この段階では飲食の忌避が死別によって引き起こされた情念(哀惜)の現れであると特定することはできないだろう。しかし Ach. の絶食が、少なくとも(復讐欲を含めた)何らかの強烈な情念によって動機付けられているということは、理解されるだろう。したがって、19巻の①および②a・b・cに描かれているものは、普遍化して、「何らかの情念によって心が占められており、それに比較して瑣末な事柄には心を向けてなどいたくない」という Ach. の内的状況であると言えるであろう。

彼の飲食忌避はその後にも数回言及されるが、それはいずれも、死んだ友への激しい哀惜ゆえの行動として描かれている。すなわち、まず19巻において Ach. 自身が、「私の気持ちを汲んでくれるのであれば、頼むから飲食で心を満たせなどと言ってくれるな、私は今言いやうもない悲しみ(ἄχος αἰνὸν)に襲われているところなのだから。」(19. 306-07)、「いっぽう私は、そなたを慕う心で(σῆι ποθῆι), 目の前の飯にも酒にも手をつける気にならぬ。」(19. 319-21)と語り、

またゼウスが彼のことを「彼は友を悼み嘆いて (*δδυρόμενος ἑταρόν φίλον*) 坐りこんでいる。他の者たちは食事に向かったが彼は食を断って何も食おうとせぬ。」(19. 345-46) と表現している。戦闘が行われている最中は食事のモチーフは現れないが、Hektor を倒して戦闘が終わると、23巻で再び食事のモチーフが登場する。この時は Ach. も、軍勢の他の者たちに対しては「供養の食事をたっぷりと振舞う」(23. 29) が、自らはその食事には加わっていないことは、すぐ後の件りから判断される。実際、すぐ後に、彼は Aga. の陣屋での会食に加わることになるが、それは将領たちが「必死に説き伏せた末」(*σπουδῆι παραπεπιθόντες*: 23. 37) のことであり、Ach. 自身はこの食事を「おぞましい食事」(*στυγερῆι δαιτί*: 23. 48) と表現している。だから、絶食をもたらしていたところの情念が、彼自ら食事をとる気になるほどまでに弱まったのだとはいえない³²⁾。それどころか、23. 37で narrative は彼を、「友を思って心が掻き乱されている者」(*ἑταίρου χώομενον κῆρ*) と表現している。また23. 43-47では、彼自身で「私は世にある限り、これほどの悲しみ (*ἄχος*) に胸打たれることはもはや再びあるまい」(23. 46-47) という言葉で悲しみの大きさを訴え、そのことを理由として (*ἐπεὶ*…: 23. 46³³⁾), 自分の頭に付いている血糊を、「Patro. を火葬に付し、墓を築き髪を切って弔うまでは」(23. 45-46) 洗わないということにゼウスに誓って厳かに宣言している。

従って、23巻冒頭の時点では、Patro. の復讐は一応達成されたとはいえ、Ach. は依然として Patro. への激しい哀惜に囚われた者として描かれていると言えるであろう。19巻で描かれていたところの Ach. のかの内的状況は、いつしか解消してしまったというよりは、むしろまだ続いていると考えるほうが自然であろう。23巻ではまもなく Ach. の「髪切り」(23. 140-51) と埋葬 (23. 255-57) が描かれ、埋葬が完了した直後に葬礼競技が開始されるわけだが、この間には彼が髪を洗ったとも食事をとったとも語られていない。だから、Ilias の聴衆は、葬礼競技の開始を見るときも、19巻の Ach. の内的状況が解消したとはいき切れないままの状態に置かれているのである。

(iv) 財物への無関心

葬礼競技が23巻で始めると、Ach. の所有している財物が賞品として羅列される。その時、Ilias を順に聴いてきた聴衆が、9巻と19巻で語られていた財物リストを思い起こし、そこで Ach. が示していた財物に対する独特の態度を思い起こすとしたら、彼は Ach. が今いかなる態度でかの財物を取り扱うのだと考えるべきであろうか。この章で見てきた観点から言うと、それには2つの考え方ができるであろう。一つは、19. 208-10/19. 308/23. 45-46 などの言葉を額面通りに受け取って、復讐と埋葬が一応済んだ今は、19巻で Ach. を捕らえていた情念が弱まり、財物のことにも心向けられるようになった、即ち、財物をきちんと査定して授受することができるようになったはずだ、という考え方である。もう一つの考え方は、復讐と埋葬は一応遂げられたとはいえ、Ach. の内的状況は19巻からほとんど変わっていないというものである。すなわち、

彼の心は Patro. への哀惜で占められているので、また9巻で観察されたように彼は財物を顔面通りの価値以上のものではないと見限っている、彼は依然として財物のことなどどうでもよいという心境にあると想定される、という考え方である。

これら2つの考え方のどちらが妥当であるかは、23巻の時点では、先に述べたように、聴衆の立場からは確定できないのが実情である。しかし確かなのは、「財物への無関心」や「財物の効能への見限り」という Ach. の内的状況がまだ解消されていないという可能性がここまでの描写の中に色濃く暗示されている、ということである。聴衆はこの可能性を考慮しながら葬礼競技の賞品供与を聴き進めるよう求められているのである。

このことを踏まえて考えてみると、前章で指摘した2点、すなわち、賞品供与における Ach. の気前のよさと変則性は、まさに、財物の（名誉顕彰としての）効能を見限った態度、および財物のことなどどうでもよいという態度の現れであるという新しい解釈の余地があることに気付く。つまり、彼が賞品を気前よくかつ変則的に供与したことは、その背後に、財物を気前よく放出することは彼にとっては何の痛みをも伴わぬことであったし、また、彼は財物がどの競技者の実績にふさわしいかを厳正に判断するというのできない心境に置かれていた、という事情があったことだったと考えることによって、その動機を容易に理解することができるようになるのである。

Ⅲ. 賞品供与と「髪切り」の類似

前章では、9・19巻に示された Ach. の財物一般に対する態度を振り返ることによって賞品供与の動機付けを探ったが、今度は同じ23巻の中に手掛りを求めてみよう。

(i) 賞品供与と髪切りとの共通性

Ach. の賞品供与の行為は、それに先行して Ach. が行う「髪切り」という行為（23. 140-52）との間に大きな類似点を持っていると考えられる。これらの類似点は、「身近な人の死に際して何らかの所有物を放棄する行為³⁹⁾」であるということだけではない。より重要な類似点となるものは、Ach. が自身の髪切りの意味を規定して自ら語る言葉によって示されている。ミュルミドネス勢が各々髪を切って棺に投じたあとで、テキストは次のように続く。

この時駿足の Ach. はふと別のことを思いつき、火葬の場から離れて黄金色の髪を切り取ったが、この髪こそ Spercheios の河神のためにと育て、房々と伸ばしていたものであった。暗然たる面持ちで葡萄酒色の海を見渡しつつ言うには、

「Spercheios よ、わが父 Peleus があなたに祈って誓ったのも空しいことになってしまった。私が無事に父祖の地へ帰還したならば、神を切って供え盛大な生贄を捧げ、さらには同じ場所、すなわちあなたの神域と香煙けむる祭壇のある場所で、五体揃った五十頭の羊を葬って水流に投じようと、老父はそう祈ったのであったが、あなたは彼の思いを果たしてくださらなかった。

今となつてはもはや、私は懐かしい故国へは帰れぬのであるから、髪は勇士 Patro. に持たしてやることにしよう。」(140-51)

Ach. はここで、部下たちも行った髪切りというありきたりの葬礼の儀礼的行為³⁶⁾に、新たな意味を、すなわち、「自分の死によって、もともと予定していた用向きには使えなくなるころの品物を放棄して、さしあたっての用向きに供する行為」という意味を与えている。この意味は、Ach. の賞品供与にも、そっくり適用することができるだろう³⁶⁾。Ach. は、葬礼競技を開始する直前の埋葬の時には、念を押すように、彼自身も近いうちに死ぬのだということを改めて語っていた(244)。勿論、財物が彼の髪同様に、「死んだら使い物にならなくなる物」であるとは一概に言えない。しかし Ach. は9巻で、財物の効能を見限っていたし、財物を喜ぶこと(κτῆμασι τέρπεσθαι: 9. 400. cf. 9. 393-409)ができるのは命あってこそそのことであり、命に比べれば財物が無価値であることを語っていた。このことは、少なくとも彼自身にとっては、彼が死んだら財物がほとんど値打ちの無いものであることを明らかにしている。したがって、葬礼競技で供与される賞品も、わざわざ説明されてはいないが、死によって「予定されていた用向きには使えなくなるころの品物」として、Ach. の髪と同じ状況にあるものであることは事実である。前章において、Ach. が財物のことはどうでもいという態度を持ち続けていると考えられることを示したが、それは何らかの情念に囚われているからだけでなく、まもなく財物が彼にとって無用の品となるからでもあると考えられる。葬礼競技開始に先立つこと120行足らずの髪切りに際して Ach. にかのセリフを語らせることによって、作者は賞品供与にも同等の意味、すなわち死によって無用となる所有物の放棄という意味があることを示唆しているのである。

(ii) 財物の放棄の積極性

髪切りに与えられた意味をヒントにすれば、賞品供与の行為の中に暗示された更なる意味を辿ることも可能となってくる。ここで髪切りの行為に内包された意味をもう少し検討してみよう。

Ach. がかの言葉を添えて Patro. に髪を供えることは、「故国へはもう帰ることができない」という確定事項の表示であるだけでなく、「故国へ帰ることができないという事態を受入れる」という意思の積極的な表示でもある。故国へ帰れないということは、まもなくこの地で死ぬ定めにあるということの意味している。だから、Ach. の髪切りは、「死の定めを受入れる」という意思表示に他ならない³⁷⁾。

彼の死の定めを受入れとは、もともと18巻において Hektor への復讐の決意と同時になされたことであった。というのは、彼は「友の仇を打てないなら生きていたくはないのだ(18. 90-93)」と語り、さらに、「Hektor の後すぐに Ach. も死ぬであろう(96)」という母の予言を踏まえたうえで、「さて今や私は Hektor を捕えるために出陣します(114)」、「今の私は華々しい手柄(i. e. Hektor 打倒)をあげたいのだ」(121)と語っていたからである。23巻の髪切りにおける死の受入れは、18巻で彼が死と引換えに Hektor への復讐を決意したことの再認であり、肯定

であるということができる。

しかも、18巻における死の受入れは、やむを得ず決意されたものではなかった。今引用した件りからも分かるように、彼がこの決意をしたのは、死欲求自体をも抱きつつのことであった。だから、髪切りでのセリフにおいてもあえて再び死の受入れを示していることは、18巻で示されていたところの死に対する彼の積極的・好意的態度をも強く思い起こさせるものである。

もちろん、23巻においては既に一応の復讐が達成されているので、自身の死に対する Ach. の態度は同じではないといえるかもしれない。しかし彼の死の選択はただ復讐欲のみによって成立したものではなかった。18. 98-99では「友の命を救ってやれなかったのだから死にたいのだ」とも自ら語っていた。ここにあるのは自責の念とも取れるし、自分に対する失望とも取れるし、友を亡くした悲しみとも取れるが、いずれにせよ、我々に分かることは、「このような状態では生きていたくない」という絶望的心境を語っていたということである。そして、そのような心境の根拠とされていた事実 (*i. e.* ヘクトルの死) はもう変わり様がないのである。18. 98-99の言葉が表現した死欲求はいつまでも有効であり、18. 98-99はむしろ、この死欲求が、Patro. への哀惜の続く限りずっと尾を引くことを暗示した言い方なのだと解されるべきである³⁹⁾。したがって、23巻に至っても、18巻に示されていた死欲求が解消されたと思ふよりも、むしろ何らかの形で続いていることを想定するのが妥当であろう。それならばなおのこと、Ach. が髪切りに際して行った意思表示の中に、死を確固として受入れる態度を読み取ることは妥当だと考えられる。死を受入れるこの積極的な態度が、Ach. の賞品供与の背景にもあると考えられる。なぜなら、「死んだら要らなくなるもの」の放棄は、死を受入れる意思が固く確かであるほど似つかわしいことと考えられるからである。このことから、Ach. が気前よく賞品供与をした理由の一つには、彼が間近に控えた死を確固として受入れようとしていたという状況が想定されるべきである、と考えられるのである⁴⁰⁾。

IV. 結 論

以上の考察から *Ilias* 23巻が描くところの Patro. の葬礼競技について次のようなことが分かった。Ach. による賞品供与の特徴は、気前のよさと変則性である。彼がそのように振舞ったのは、彼が財物の名誉顕彰としての効能を見限り、財物のことなどどうでよいという心境にあったことであった。また、彼にとって賞品供与は、死んだら要らなくなる財物を手放すという行為であり、気前のよさは、確固として死を受入れる態度の反映でもあった。このように彼の賞品供与は、死者や競技者の名誉への社会的配慮だけでなく、彼の内的状況を大きく映し出した行為であると考えられる⁴⁰⁾。

ビブリオグラフィ

- Ilias* のテキストは、
 T. W. Allen, *Homeri Opera*, Tomus I&II (1902)
 を使用した。訳文は、
 松平千秋訳、ホメロス、『イリアス』(上)・(下)、(1992 岩波文庫)
 を参考にした。その他、本稿で言及される文献は次の通りである。
 M. Andronikos, *Totenkult* (Archaeologia HomERICA-W) (1968)
 W. Burkert, *Homo Necans: The Anthropology of Ancient Greek Sacrificial Ritual and Myth*
 (1983)
 M. W. Edwards, *The Iliad: a Commentary volume V: books 17-20* (1991)
 M. I. Finley, *The World of Odysseus* (1979)
 J. Griffin, *Homer on Life and Death* (1980)
 J. Griffin, 'Heroic and Unheroic Ideas in Homer', in J. Boardman et al. ed., *Chios: A conference
 at the Homereion in Chios 1984* (1986)
 J. Griffin, *Homer: Iliad IX* (1995)
 B. Hainsworth, *The Iliad: a Commentary volume III: books 9-12* (1993)
 A. Heubeck, et al., *A Commentary on Homer's Odyssey, volume I introduction and books I-VIII*
 (1988)
 D. P. Irish, et al. ed., *Ethnic Variations in Dying, Death and Grief: Diversity in Universality*
 (1993)
 川島重成, 『イリアス:ギリシア英雄叙事詩の世界』(1991)
 Laser, *Sport und Spiel* (Archaeologia HomERICA-T) (1987)
 A. L. Macrakis, 'Comparative Economic Values in the Iliad', in K. J. Rigsby ed., *Studies
 Presented to Stirling Dow* (1984)
 C. Macleod, *Homer: Iliad XXIV* (1982)
 K. Meuli, 'Entstehung und Sinn der Trauersitten', *Schweizer Volkskunde, Korrespondenz-blatt
 der Schweiz* 43 (1938), 91-109 = *Gesammelte Schriften* (1975), 333-51
 L. Malten, 'Leichenspiel und Totenkult', *Mitteilungen des deutschen archaeologischen Instituts
 (römische Abteilung)* 38-39 (1923-24), 301-40
 A. M. Parry, 'The Language of Achilles', *TAPhA* 87 (1956) 1-7
 R. Parker, *Miasma: Pollution and Purification in Early Greek Religion* (1983)
 M. B. Poliakoff, *Combat Sports in the Ancient World: Competition, Violence, and Culture*
 (1987)
 J. M. Redfield, *Nature and Culture in the Iliad: The Tragedy of Hector* (1994)
 N. Richardson, *The Iliad: a Commentary volume VI: books 21-24* (1993)
 L. M. Roller, *Funeral Games in Greek Literature, Art, and Life*, Diss., U. Penn. (1977)
 R. Seaford, *Reciprocity and Ritual: Homer and Tragedy in the Developing City-State* (1994)
 O. Taplin, *Homeric Soundings: The Shaping of the Iliad* (1992)
 S. Yoshitake, 'Disgrace, Grief and other Ills: Herakles Rejection of Suicide', *JHS* 114 (1994),
 135-53
 G. Zanker, *The Heart of Achilles: Characterization and Personal Ethics in the Iliad* (1994)

注

- 1) p. 101. 各書誌については前頁のビブリオグラフィを参照のこと。
- 2) 会葬者に食事を供することまではかなり普遍的に見られるが、通常の見分けと遺産相続を除く金品の直接的な授与が記述された例は、北米大陸の Lakota 民族（死期の近づいた者が死ぬ前に見分けをする）を見出しただけであった。cf. D. P. Irish *et al.*, 107.
- 3) ホメロスとヘシオドスの作品で言及される賞品つきの競技会はすべて葬礼競技である。また逆に、ホメロスとヘシオドスの作品で言及される葬礼競技6件のうち、賞品についての記述がないものは1件のみである。これに対し賞品の多さや豪華さを言及しているものは4件を数える。
- 4) Malten, p. 307によれば、古代ギリシアから34件の葬礼競技が報告されている。
- 5) 葬礼競技についての最も詳しい記述をしている Roller, Laser, Andronikos らの文献にも、賞品の総量は言及されていない。ただし Macrakis, 214-15 の提示する計算方法によると、Ilias の葬礼競技において、armed duel と鉄塊投げと弓競技を除いた5種目で出された賞品の総額は、黄金で 72.5 talanton (以下tal.) 分となる。ちなみに、Lykaon を Patro. が Euenos に売り飛ばした時の額が 100tal. とされている (21.75)。また9巻で Aga. が Ach. に申し出た即刻支払いの慰謝料総額は238 tal. と算定される。牛一頭が黄金 1 tal. に相当するという勘定である。
- 6) Eumelos に与えられる賞品は、Ach. が Asteropaios から奪った胸当てである。二等賞の賞品と同等ということは、Macrakis の計算によると 8 tal. 相当ということになる。
- 7) cf. Poliakoff, p. 153. ἔγχοςとはホメロスにおいては通常槍である。古典期には刀をも意味するようになるので、narrative において紹介された賞品の一つ目のもの ἔγχος (798) は、勝者賞の「トラケ製の太刀」(πάσσανον 807) をあらかじめ示しているのだと考える向きもあるかもしれない。しかし、*l.* 798 で付された δολιχόσκιον というエピソードはこの武具の長さを強調しているものであるから、太刀ではなくて槍であると考えるのが妥当である。なお *l.* 798 はそっくりそのまま *l.* 884 で第8番目の槍投げ競技を導入する時にも使われており、そこでは明らかに槍が意味されている。
- 8) 先に説明した22.164の例を参照せよ。また、Patro. のための葬礼競技では、競技者は予選などで選ばれた者が出場するのではない。テキストを見る限り、自ら名乗り出る者が出場する模様である。
- 9) この場合どちらの賞品の価値が上であるか示されていない。cf. Laser, p. 80.
- 10) cf. 9. 314-22.
- 11) cf. Macrakis, 211; Richardson *ad* 23. 269.
- 12) cf. Laser, 80.
- 13) Macleod, 30-31; Seaford, 161; Redfield, 206; Richardson, 165-66; Taplin, 254.
- 14) cf. Macleod, 31: 'merit is recognized and rewarded all round'; Richardson, 165: 'a strong sense of restoration of the normal'.
- 15) cf. Macleod, 28.
- 16) 川島, 225; Richardson, 165; Zanker, 110.
- 17) Laser, 79; Taplin, 253. cf. Hes. *Erga*, 654-59; Redfield 209-10; Finley, 121; Heubeck *ad* 8. 392-93.
- 18) 前者について、即ち、賞品供与をそのようなものとして描いたことによって、どのような効果が生じているか、ということについての問題は、紙幅の都合上、稿を改めて論じたい。
- 19) 23巻中、葬礼競技の前の「葬儀」の部分では、葬礼行進の規模にしる、火葬台のサイズにしる、火葬台への供物や犠牲にしる、Ach. が極端なスケールでとり行ったものはみな、Ach. の哀惜 (grief) の大きさを表すものである、という Richardson, 165 の指摘は大いに参考になるだろう。葬儀主催者の哀惜が、葬儀の一つ一つの ritual をとり行う熱意の中に形を変えて現れることがある、というのである。
- 20) その内容は、三脚釜7つ、黄金10tal., 釜20個、馬12頭、レスボスの女7人、そして Briseis の身柄

が即刻支払い用。それに加えて、「黄金製、青銅製の品々」、トロイエの美女20人、Aga. の娘1人、「見事な品々」の持参金、町7つも約束される。

- 21) cf. Griffin (1995) *ad* 9.387.
- 22) Griffin (1995), 109; Hainsworth, 101.
- 23) Il. 12.310-22: Sarpedon の認識。cf. Parry, 3; Finley, 119-20; 川島, 49.
- 24) 1巻で Ach. が、戦利品として得ていた Briseis を奪われたことを、名誉が損なわれたととらえている (1.353-56) という事は、彼もまた財物(戦利品)を名誉の顕彰としてとらえていたことを示している。
- 25) cf. Hainsworth, 102.
- 26) Griffin (1995), 110: 'mere objects of cash value'. もちろん、9巻の Ach. は財物をすべて要らないと言っているわけではない。彼は *l.* 356-67 ではこの戦争で *γέρας* として得た財物はすべて故国へ持って帰ると言い、*l.* 400 では、故国へ帰ったら父の蓄えた富を享受しようと言っている。つまり、既に所有している財物については、それを放棄せず大切に使うという態度を示しているわけである。しかしそれは彼が財物を生活の糧として見込んでいるということであり、額面通りに評価しているということに過ぎない。
- 27) 下注29参照。
- 28) 23.278. 運んだ者は単に Myrmidones 勢と表示されているだけであるが、この中に Ach. は含まれないと解するのが自然であろうと考える。cf. 23.129 & 135-42.
- 29) 「財物に対する彼の超然性」 'superiority to the idea of possessions' については、cf. Griffin (1986), 7. 19.147 は、一応 Allen のテキストの *παρά* というアクセントに基づいて考える。ただし、*πάρα* とするテキストもある。その場合は、財物に対する Ach. の無関心は更に決定的になる。この件については、cf. Richardson *ad* 19.147-48.
- 30) 彼は運ばれてきた償い代を黙って受入れるが、それは拒む理由がないからであって、和解の際に加害者が被害者に補償を支払うという社会的な慣習に黙って従ったに過ぎない。24巻における同様の例については、cf. Macleod, *ad* 24.594-95. また、cf. 9.632-36/18.497-500. Ach. が財物に心を向けるようになったからだとは言えない。
- 31) e. g. Lucian, *De Luctu* 24. ただし、Parker, 37 の指摘するように、mourning fast を記した古代文献は思いのほか少ない。
- 32) Richardson *ad* 23.48.
- 33) Richardson *ad* 23.44 は、*ὁ θεὸς ἐστὶ* (44) が divine sanction を暗示するものだという。しかし、「頭を洗ってはいけない」ことの理由として、このように主観的なことがあげられているということは、我々が彼のこの宣言は単に神の掟に従っただけのものだと考えるべきではないことを明らかにする。
- 34) precious commodity や personal profit を放棄するという、葬礼の一つの 'prominent pattern' については、cf. Burkert, 54-55. もちろん Burkert の定義によるならば、髪切りはこのカテゴリーには入らないであろうが、Ach. のセリフにより特別の意味を与えられる髪切りの意味を考える上では参考になる。
- 35) 葬礼としての髪切りの一般的意味については、cf. *Od.* 4.197/24.45, および Andronikos, 18-20.
- 36) ritual に新たな意味を加えることは、ホメロスの両詩に時々見られることである。cf. Edwards, 22-23; Griffin, *HLD*, 16-17. もともと ritual である髪切りに新たな意味を加えるということを Ach. にさせたのなら、葬礼競技における賞品供与がたとえももとは ritual であったとしても、これにも新たな意味が込められている可能性も否定できないであろう。
- 37) Seaford, 168; Schein, 156. cf. Zanker, 109: 'preenactment of his own death'.

- 38) このような死欲求が、復讐を果たした後も広言することのできる死欲求であるかどうかは別の問題である。cf. Yoshitake, 143-45.
- 39) 更に言うならば、財物が、本来的に船で故国へ持ち帰るべきものであり (cf. 1. 300/9. 357-67), また特に彼にとっては命あってこそその喜びに他ならないものであれば、それは生きて故国へ帰れない彼にとって、どうでもよいものであるばかりか、目障りで厭わしいものであると想定するのは難しいことではない。このような想定の妥当性は、彼が死の予告をする Thetis と Xanthos に対して苛立ちを見せる件り (18. 97/19. 419) および、Ach. が Hektor の贖い代を故国へ持ち帰るよう奨める Priamos に苛立ちを見せる件り (24. 560-68) によって裏づけることができる。そして、そのように想像することによってこそ、Ach. が財物の放出に熱心である理由がより明快に理解できるのである。
- 40) この見解は、armed duel に見られる残酷性など、この葬礼競技の諸問題の解決を助けるものとなるであろう。このことも、紙幅の都合上、稿を改めて論じたい。